変わる日本の「暮らし」と「まち」 13

DNAに刻まれた復興への思い

宮城・塩竈市錦町災害公営住宅整備

（2011年◆平成23年）

新田匡央
にった・まさお
illustration：Shigeyuki Sakata

岩手県南部から福島県北部にまたがる仙台藩は、戦国武将の伊達政宗が開いた。その伊達家が崇敬を寄せたのは、陸奥国一之宮と呼ばれる、最も社格が高い鹽竈（しおがま）神社だった。政宗も土地を寄進し、社殿を造営した。鹽竈神社の創建の年代は不明だが、平安時代初期に編纂された『弘仁式』に記述があるという。

塩竈市のほぼ中央、松島湾を見下ろす山の頂上に建つ鹽竈神社には、国の天然記念物に指定された鹽竈桜が咲き、地域の人に親しまれている。神社では祭礼が行われるが、祭礼に欠かせないのが神に供える御神酒だ。鹽竈神社の御神酒づくりは、塩竈で創業して289年、日本酒「浦霞」で知られる佐浦酒造にも任されている。

こうした歴史と文化に彩られる塩竈は日本三景の松島に近く、観光拠点という顔も持つ。松島と塩釜港を結ぶ遊覧船は、多くの観光客で賑わっている。その塩釜港に入港するのは、遊覧船だけではない。数多くの漁船が、全国でも屈指の水揚げを誇るマグロを積んで埠頭に横付けされる。なかでも生マグロの水揚げは日本一だ。

◆塩竈の人びとのために

東日本大震災と大津波で、この塩竈も大きな被害を受けた。松島に点在する島々が天然の防波堤になったとはいえ、4メートルを超える津波が市街地を襲った。被災家屋は5千軒に迫り、多くの人が家を失った。市民が安住できる家を建てることは、塩竈にとって喫緊の課題となっていた。

しかし、建設用地の確保は困難を極める。もともと湾と丘陵に挟まれた塩竈には、ほとんど平地がない。現在の市街地の6割は、埋め立てでつくられた平地だ。そこは津波のリスクが高く、災害公営住宅は建てられない。わずかに残された平地も、仮設住宅に提供されているため対象外だった。

そこで、地元の「名士」に土地の提供が依頼された。すると、真っ先に快諾した人物がいた。浦霞を醸造する佐浦酒造の13代目、佐浦弘一氏だ。佐浦氏は、錦町地区に所有する佐浦山の一部を提供すると申し出た。この行動の背景には、佐浦家のDNAに刻まれた塩竈復興への強い思いがあった。

「何かあったときには、地域のために貢献すべしという伝統のようなものがあったのです」

佐浦氏はそう語る。江戸時代に起こった飢饉では、酒造りの原料である米を住民に供出した。1867年に塩竈の3分の2を焼き尽くした大火事では、所有する山から切り出した杉の木を住宅用の資材として提供した。塩竈で災害が起こるたびに、佐浦家は復興に尽力してきた歴史がある。

「地元で長く商売を続けてこられたのは、地域社会の繁栄があったからこそ。地域と密接な関係を持てば住民の信頼を得られ、私たちの商売も発展していくのです」

震災の混乱のなか、土地が提供されたことには感謝している。そう語るのは、宮城、福島の災害公営住宅建設支援を担当するUR職員の永井正毅だ。ただ、その土地は不整型で斜めに傾いているため、集合住宅を建設するには最適とはいえなかった。しかも、すぐ下にはJR仙石線が通る。工事中に物を落としたら、列車の運行を停めてしまう。難しい条件だからこそ、塩竈の人や土地を提供してくれた人を思い、永井をはじめURスタッフは強く心に刻み込んだ。

「この土地に、必ずや災害公営住宅を建設してみせる」

来年の秋頃には模型のような集合住宅が完成する。そして2年後の春、桜が咲くのが楽しみである。

◆桜の木を復興のシンボルに

災害公営住宅に入居する人たちにはさまざまな要望がある。仮設住宅で暮らす人にとって「音」の問題は深刻だった。集合住宅に住んだことがないため、隣家の音が筒抜けであることが強いストレスになっていた。また、公営住宅は広さの基準が決まっている。一軒家に住んでいた人が切実に訴えるのは、盆暮れに帰省する子や孫が泊まれないという心配だった。URは、こうした復興ならではの問題にも真摯に向き合う。

「住民がどのようなアイデンティティーを持って、どのような生活をしてきたのか。震災前の生活をできるだけ変えずに安全・防災にも考慮し、地域に合った住宅を建てたいのです。そのために住民の声を丁寧に聞き、最善の選択をすることに心を砕いています」

永井が続ける。

「さらに言えば、土地の歴史や文化を守り、地域のコミュニティを形成する手助けをするのも、私たちURの役割なのです」

佐浦山の歴史を調べ上げたURは、かつて数十本の桜が咲き誇り、花見の季節には大宴会が催されていたことを知る。だが、地域住民が楽しみにしていた佐浦山の桜はわずかしか残っていない。URは、災害公営住宅に桜の山を再現することを考えた。

「敷地に3棟40戸の住宅を建てるだけでなく、復興のシンボルとして桜の木を植樹するのです。さらに、敷地内に新たな公道を整備して、地域の方が誰でも通れるようにします。桜を懐かしく思った方と新たな入居者が、桜を通じて交流してくれるかもしれません。ここ錦町を、地域の方が自由に集う憩いの空間にしたいですね」

この発想こそが、URのDNAだ。佐浦氏も、URが立案したコンセプトに賛同している。

「佐浦山の桜が再生すれば、昔のお花見が復活するかもしれませんね。地域の人の賑わいの場になるのが、今から楽しみです」

災害公営住宅の一角には、キッチンを備え付けた集会所を設置する予定だと永井は言う。

「将来、再び災害が起こらないともかぎりません。住民の方々に少しでも安心していただくため、数日間であればそこで炊き出しができる機能を持たせます。そしてそれが、住宅のなかを自由に通行する地域の方からいつも見えるようにしておくのです。何かあったらここに来ればいい。そんな安心感を、地域の方にも認識していただけたら嬉しいですね」

歴史ある塩竈に新たに誕生する錦町災害公営住宅は、14年の秋までには完成する予定だ。

街に、ルネッサンス
UR都市機構
［企画制作］新潮社